

小児心身症の背景としての親(父)子関係

○ 鈴木 榮 (名大・医・小児科)

久世 敏雄 小崎 武

小嶋 秀夫 (小川 正道)

(宮川 充司) (吉田 政己)

小児心身症の増加は著しいものがあり、小児科医としてはこれを避けて通ることは出来なくなっているが、これについての対応はまだほとんど出来ていない。分担者は、長年の小児心身症診療経験から、本症発症の背景としては親子関係、とくに父子関係が重要なのではないかと考えていたので、この点を解決して小児心身症の診療、出来れば予防にも役立てようと考えて、以下のような研究を行なった。

1. 小児心身症の臨床統計的観察

小児心身症の定義はまだ確立されていないので、今回はやや広く解釈して、

- a 身体症状、習癖などの発現に、心理的要因が強く関与しており
- b その治療に心理療法や環境調整が有効であるものとし
- c 器質的疾患は可能な限り除外した。

対象は昭和20～54年間の外来、入院心身症患児2,613名である。

本症の頻度は、外来患児では約10%，入院患児では約5%を占めていた。年令別では、4～13歳児に多く、とくに小学上級生～中学生に多かった。発症時期は4月と9月に山があり、学業との関係が推定された。また母親が職業をもっている場合が対照より高率であった。

症状としては頭痛、腹痛、発熱、嘔吐、遺尿、チックなどが多かった。

2. 小児心身症の親子関係の調査

前項の対象患児の中で、充分な臨床記録が整っており、かつ田研式親子関係診断テスト、YG検査も実施されている症例について検討した。

しかしこれらのdataからは、心身症群の特徴はつかめなかった。その理由はどこにあるのかも不明で、別の検査方法を考える必要に迫られた。

3. PSDカードによる調査

新らしく小児心身症調査カード(PSDカード)

を作成し、これと心理テストを組合わせて、一部の例について調査検討した。

この結果では、本症は長子に多くみられること、乳児期の栄養法としては人工栄養が多いことが明らかになったが、専業主婦の子どもにもみられ、一戸建に住んでいる子どもに多いことも分った。

しかしこのような調査方法には余り期待が出来ないので、現在はこの研究は中断している。

4. 家族関係インベントリー

family relation inventory
(F R I) の作成

本テストは子どもに対する親の態度・行動に関する4尺度と家族関係に関する4尺度からなり、1尺度は12項目からなっている。回答の所要時間は15～20分である。

これを用いて小児心身症および対照群(内分泌疾患、心因性とは考えられない気管支喘息、神経疾患など)について検討したが、対照群の大部分が慢性疾患であったためか、心身症群と対照群との間に、親子関係については有意差が見出せなかった。

しかし、あるタイプの心身症児の母親は子どもを受容していないこと、不安の度合が高いことなどの特徴があるのではないかと考えられる結果が得られており、さらに検討の必要がある。

また具体的には、各症例についての本テストの結果は、かなり適確に心因と思われる家族関係の問題点をピックアップ出来て、治療を進めるうえに有用であることが多かった。

以上から、本テストの有用性については、現在の段階では明確な結論を出すことは出来ないが、小児心身症治療の手段としては使えると思われるし、さらに検討すれば発症の背景としての家族関係の究明にも役立つのではないかと考えられる。

5. NICUに入院した児の親子関係について 良好な母子関係の形成には、新生児期が大きな

意味をもっていることは衆知のところであるが、その重要な時期に母から離されてN I C Uに入院させられた児の母子関係がどうなるかは、学問的に興味深いだけではなく、児自身にとっての大問題でもある。心身ともに健かに育てなければ、おもに身体面のこれまでの新生児医学の進歩も影がうすくならざるを得ないであろう。

今回実施した母親へのアンケート調査の結果では、早期かつ出来るだけ頻回に母子の接触の機会を持てるようにすることが、母の不安も少なくし、よい母子関係の形成に役立つように思われた。また、可能な限り、母乳で育てることが好結果をもたらすようである。

以上、小児心身症の背景としての家族関係に若干の検討を加えてみたが、小児の心身症は成人のそれとは違う面が若干あり、より複雑な発生機序も考えなければならない、また臨床面の研究もまだ不充分である。患児をとり巻く家族関係は、発症、治療両面に関係していると思われるが、これを明らかにする手段はまだほとんどないといってよい。今回のF R Iは若干この目的のために役立つと考えられるので、さらに検討、改善に努める予定である。

小児心身症の増加、その家族的背景が、非行、暴力などのそれと共に通性をもっていることなどを考え合わせると、本症の研究にもっともっと力を注がなければならないことを痛感する。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文書認識)ソフト使用 ↓

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

小児心身症の増加は著しいものがあり、小児科医としてはこれを避けて通ることは出来なくなっているが、これについての対応はまだほとんど出来ていない。分担者は、長年の小児心身症診療経験から、本症発症の背景としては親子関係、とくに父子関係が重要なのではないかと考えていたので、この点を解決して小児心身症の診療、出来れば予防にも役立てようと考えて、以下のような研究を行なった。